『ハイメンの仮面劇』における国家統合の言説とその両義性

西　田　侑　記

Synopsis: As an erudite exercise in the topos of union, Ben Jonson's *Hymenaei* responds directly to the unique political situation of England in 1606. It was primarily designed to celebrate the high-profile marriage of Robert Devereux, Earl of Essex, and Frances Howard, but the nuptial occasion provided Jonson with an opportunity to articulate the more symbolic marriage of England and Scotland. He deployed the analogical trope of the sexual union of the couple with the political union of King James's two realms, and as such, eroticism emerges as a key construction of nationhood in this newly opened space. This paper aims to demonstrate how the imagery of marriage and its political analogue in *Hymneaei* is seen to enhance yet jeopardize the happy state of ideal unity when relocated within the specific context of British Union.

序　　論

1605 年の『黒の仮面劇』（*The Masque of Blackness*）を執筆したベン・ジョンソン（Ben Jonson）は，ジェイムズ一世（James I）お抱えの詩人として翌年のクリスマスシーズンも宮廷の劇壇に戻ってくるが，このとき書き上げたのは，うら若き花嫁と花婿をことほぐ祝婚の仮面劇である。『ハイメンの仮面劇』（*Hymenaei*）は，エセックス伯ロバート・デヴルー（Robert Devereux）とサフォーク伯の令嬢フランセス・ハワード（Frances Howard）の婚姻を祝して上演され，そこではイニゴー・ジョーンズ（Inigo Jones）の手がけた豪華な舞台装置もお披露目された。これは対立していた両家の関係を改善し，宮廷内の権力バランスを調整するために企図された，いわゆる政略結婚で，まだ十代半ばの新郎新婦は床入りも期待されていなかった（Butler 116）。こうした事情に照らして考えてみると，舞台上で展開される寓話が夫婦の社会的結合を万物の神的調和になぞらえ，二人の

個人間の事柄をほとんど無視する形でことさら Union の価値を強調しているのもうなずけるであろう。[1] 無論，このような筋書きに派閥抗争の火種を絶やそうとする国王の意図を読みこむのは容易い。しかし，実際に観劇し，芝居の内容を要約したジョン・ポリー（John Pory）の書簡を見ると，そこには Union のシンボリズムに潜む初期ジェイムズ朝特有の興味深い政治的言説がはっきりと捉えられるのである。

> The concert or soul of the Mask was Hymen bringing in a bride, and Juno Pronuba's priest a bridegroom, proclaiming that these two should be sacrificed to Nuptial Union. And here the Poet made an apostrophe to the Union of the Kingdoms.（qtd. in Gordon 169）

ポリーはジョンソンの寓話をロバートとフランセスの婚姻の Union と当時巷を賑わせていたイングランドとスコットランドの国家的 Union の照応に基づいて解釈し，この宮廷仮面劇の政治的コンテクストを理解する上で非常に有益な視座を与えてくれる。

スコットランド王ジェイムズ六世は 1603 年にイングランド王位を継承してジェイムズ一世になると，伝統ある二つの王国を統一するため，宮廷や議会において急進的な政策を次々と打ち出し，1604 年 10 月には自身の称号を「グレートブリテン国王（King of Great Britaine）」に改める布告を発令して臣民の意識改革を試みた（*Stuart Royal Proclamation* 94）。また，これに先立ってジェイムズはイングランドおよびスコットランドをグレートブリテンに改名する案を議会に問うたが，庶民院のまとめた意見書には国名変更に対する厳しい批判の数々がつづられていた（Galloway 28-29）。このように，グレートブリテン構想ともいえる試みはステュアート朝治世下の最初の五年間，王侯貴族，政治家，法律家らの間で激しい論争を巻き起こした。そして，『ハイメンの仮面劇』の上演年がそうした政策論争の時期と符合する点を見落としてはならない。ポリーの覚書が示しているように，この宮廷仮面劇は花婿と花嫁の結婚，宮廷内の超党派的融和，そしてイングラン

ドとスコットランドの統合という三重の Union を意識した作品なのである。

『ハイメンの仮面劇』の演劇的意味をジェイムズ一世のグレートブリテン構想に位置づけようとする試みは，1945 年に D・J・ゴードン（D. J. Gordon）が Union のシンボリズムに国王礼賛の言説を読みこんだ論考を発表して以降，長らく批評の表舞台から後退していた印象は否めなかった。しかし，2000 年代に入ると，ミクロ政治史的観点から Union の表象に光を当てた研究が散発的にではあるが発表され，ゴードンのアプローチに修正を加える。マーティン・バトラー（Martin Butler）によると，王権の神性に重心を置いたこの宮廷仮面劇は Union の意味を宇宙的原理にまで拡大しつつ，婚姻と国家統合の両方を抵抗不可能な王の御業として描出しているが，その作劇術には急進的なイデオロギーが見てとれるという（115-120）。これとは対照的に，ケヴィン・カラン（Kevin Curran）は残滓的および勃興的国家観の微妙な混在を観取し，ジョンソンは国家と身体の類比に内在する危険な両義性が表面化しないよう注意を払っていたと論じる（43-56）。これらの論考は政治的身体のメタファーについて示唆に富む解釈を与えているものの，テクスト偏重の傾向が否めず，宮廷仮面劇の視覚に訴える部分や祝婚歌における政治的言説など，上演に関する分析には再考の余地があるように思われる。本稿では，スコットランド人の役割や古典のアリュージョンにこめられた劇作家の意図にも目を配りつつ，『ハイメンの仮面劇』におけるジェンダー化された身体表象を国家統合論争のコンテクストの中で読み直してみたい。イングランドとスコットランドの結婚という視点から Union の寓話を眺めてみた場合，そこにはいかなる両義性が潜んでいるのかを明らかにすることが本稿の目的である。

1. 国家統合論と結婚のメタファー

国家を人間の身体に見立てる伝統は古典まで遡ることができるとしても，十七世紀初頭のイングランド特有の政治的風土において，この常套的なレト

リックがどのように利用されたのかを知る上で，いくつかの議会演説を概観しておくのが有益であろう。[2] 1604 年から 1607 年まで断続的に招集された議会で，ジェイムズ一世はブリテン島統一の必要性を繰り返し訴えたが，類比的にその有力な論拠となったのはまさしく婚姻ということほぐべき社会的結合であった。

> Vnion is a mariage : would he not bee thought absurd that for furthering of a mariage betweene two friends of his, would make his first motion to haue the two parties be laid in bedde together, and performe the other turnes of mariage? must there not precede the mutuall sight and acquaintance of the parties one with another, the conditions of the contract, the Ioincture to be talked of and agreed vpon by their friends, and such other things as in order ought to goe before the ending of such a worke?（James VI and I 163）

「統合とは結婚である」と標榜する歯切れのよい宣言はしかし，国家統合が婚姻と理屈を同じくし，同意の上に成り立つことを表している。これが政策論争の後期にあたる 1607 年の演説である点を考えれば，段階的な Union の実現を説く慎重なことばの調子は現実に即した政綱を反映していると言える。ジェイムズが自身の政策を，あくまで絶対権力による併合ではなく臣民の承認に基づいた統合である事実を強調しているのは，最近まで敵対関係にあった両王国の印象操作という意図があったかもしれない。また，同じ論理で議員たちの説得を試みたノーサンプトン伯ヘンリー・ハワード（Henry Howard）は，“it behooves us all not only with a word to wish but with our whole industry to provide that England and Scotland…may kiss one another”（qtd. in Peck 190）と，いまや同君連合を形成するイングランドとスコットランドの完璧な融和を祈願し，口づけの比喩によって聴衆の国民感情に揺さぶりをかけた。こうした弁論が統合に懐疑的な議員を実際に説得できたかはさておき，国家統合論争の中で比喩的言語，とりわけ結婚のメタ

ファーが重要な役割を果たしたというのは疑いようがないと思われる。婚姻という文化的実践は国家的身体の結合を肯定的に描出するのに格好の概念を提供したわけである。

無論，ベン・ジョンソン自身もこうした政治文化と無縁ではなかった。『エピグラム集』（*Epigrams*）に収録された短詩「統合について」（“On the Union”）では，国家統合を結婚に喩えるこの政治的レトリックをしたたかに，そして存分に利用している。

> When was there contract better driven by Fate?
> Or celebrated with more truth of state?
> The world the temple was, the priest a king,
> The spousèd pair two realms, the sea the ring.（lines 1-4）[3]

婚姻の仲介者としての国王，夫婦に見立てられるイングランドとスコットランド，結婚指輪のように島を円環する海など，この詩にちりばめられたメタファーはどれも結婚のトポスと巧妙に関連づけられ，『ハイメンの仮面劇』における Union の表象を予期させる。[4] だが，これらの修辞的表現に実際の結婚という場とそれに相応しい象徴体系が与えられた場合，結合のイメージは比喩の領域を超えて実在の夫婦に投影される。すなわち，そこでは自然的身体と国家的身体の境界が曖昧になり，エロティシズムが国家意識の中心的概念となるような文化システムが構築されるのである。そうした仮定に基づいてジョンソンによる Union の祝祭を読み解いてみると，劇の前半を占める幕間狂言には，グレートブリテンの誕生が想起させた社会的不安が書きこまれているように思われる。

2. スコットランド人のセクシュアリティ

『ハイメンの仮面劇』の場面設定はローマ風の結婚式に基づいている。[5] 舞台上には婚儀をとり行うための祭壇が見え，そこには結婚の女神ジュノー

（Juno）を讃える碑文が刻まれている。余興が始まると，ハイメン（Hymen）が新郎新婦役の二人（実際のロバートとフランセスではない）や供の者たちを引き連れて現れ，「こうした儀式の女主人（mistress of these rites）」（line 54）である Union をことほぐ祭りの開始が宣言される。ところが，この宣言が終わるや否や地球型の舞台装置から「体液（Humours）」と「情動（Affections）」を表象するそれぞれ四人ずつの男性宮廷人が飛び出す。婚礼の儀を妨害しようと剣を抜く八人の反乱分子と対峙したハイメンは，“Save, save the virgins! Keep your hallowed lights / Untouched, and with their flame defend our rites”（lines 100-101）と叫んで女性参列者に注意を促すが，これにより抜刀行為は疑いようもなくセクシュアルな含蓄のある動作として認知される。そうした男性的欲望のイメージと関連してとりわけ注目に値するのは，「体液」あるいは「情動」役で出演したスコットランド人ジェイムズ・ヘイ（James Hay）の存在である。この人物は，エリザベス一世（Elizabeth I）崩御の知らせを受けてスコットランドから南下してきたジェイムズ六世に同行する形でイングランドに入国すると，その後すぐに国王寝室付き（Gentleman of the Bedchamber）として新王に寵愛された（*DNB* 265）。新設されたこの役職は君主に謁見するための窓口として従来の私室付き（the Privy Chamber）を実質的に格下げしてしまっただけでなく，創設当初はスコットランド人に独占されていた（Cuddy 110）。こうした宮廷の内情にイングランド人が不満を抱いていたであろうことは想像に難くなく，それはやがてスコットランド人全般を標的にした風刺となって現れる。[6] 後年のことではあるが，1610 年代中頃に執筆されたと目される中傷詩の詩人は，“They whip our Nobles and lie with their wives”（“Early Stuart Libels” E 1）と，イングランド貴族の妻に対する彼らの蛮行を揶揄している。ここには，北方の隣人を自制が利かず，性的に放縦な野蛮人とみなすイングランド人の差別が透けて見えるが，こうした極端な類型イメージは舞台上で性的欲望を表象する寵臣の姿にも投影されうるのではないか。すなわち，結婚式の余興におけるジェイムズ・ヘイの役柄は，彼のセクシュアリティおよびスコットランド的アイデンティティを潜在

的に危険なものとして前景化する点で，スコットランド人批判の言説と重なる部分を含んでいる。そして，国家に対する偏見に置き換えられたジェンダー的不安を解消するため，ジョンソンは「理性（Reason）」による秩序の回復を要請するのである。

「理性」は人間の頭脳に相当する地球の頂に座していて，知性の光を表すランプと正義の剣をもって舞台に降りてくる（lines 110-114）。彼女が「体液」と「情動」を叱責し，いとも容易くその欲望を抑えつけてみせると，つぎに舞台の奥からジュノーの「権能（Powers）」を表象する八人の女性宮廷人が姿を現す。やがて，「理性」は舞台上の男性と女性をそれぞれペアにするよう「秩序（Order）」に命じ，舞踏者たちは踊りながら自身の身体で新郎エセックス伯の名前をつづり，最後には全員で大きな輪を作る。“Now no affections rage, nor humours swell, / But all composèd dwell”（lines 291-292）という「理性」のことばが示すように，いまや男性的欲望は正しく無力化され，反乱分子たちは問題なく Union の秘儀に参列できるようになった。そして，ジョンソンの戦略が婚姻による欲望の昇華を描くところにあるとすれば，国王夫妻が理想的な Union の象徴として神格化されていても何ら不思議ではない。ハイメンはまずジェイムズ一世の平和主義的統治をことほぐと，すぐに観客の視線を当時妊娠中だった王妃アン（Anne）の身体へと誘導する。[7]

> ’Tis so. This same is he,
> The king and priest of peace!
> And that his empress, she,
> That sits so crownèd with her own increase!（lines 71-74）

妊婦の姿を形容する“increase”の一語はブリテン島統一を願う「理性」の台詞“Long may his［i.e. King James’s］Union find increase / As he, to ours, hath deigned his peace”（lines 379-380）とも反響して，「貞節な口づけ（chaste kisses）」（line 77）による夫婦の Union と国王の叡智による

政治的 Union との類推を思い起こさせる。子どもの誕生を新国家創造に重ね合わせ，国家統合の未来的展望に比重を置くこうした仕掛けは，スコットランド人男性の表象に潜む社会的不安を表面上は解消している。ジョンソンによる一連の寓意劇は国家統合論者にとってこの上なく満足のいくものだったように見えるかもしれない。

しかし，「理性」はスコットランド的アイデンティティに結びつけられた性的欲望を抑圧こそすれ，その存在を否定するわけではない。子孫繁栄のテーマは必然的に新しい命の生成過程に介入せずにはいられないことに留意しておく必要があろう。しかも，テクストの随所には女性的身体の征服を暗に示唆する表現が用意周到に仕込まれている。長広舌をふるって Union の普遍的価値を吹聴する「理性」は，“even as moisture mixed with heat / Helps every natural birth to life, / So, for their race, join man and wife”（lines 153-155）と，夫婦のあるべき姿を元素の配合になぞらえる。この比喩について，カランは“Physical intimacy is hidden from our view, relayed instead through a clinical, Copernican account of the mixture of moisture and heat”（52）と述べ，肉体的結合の生々しさを中和するものとして解釈している。だが，体液論に基づいた生理学において「湿」と「熱」の性質はそれぞれ女性と男性の身体的特徴に帰せられることを考えれば，「理性」の台詞が Union の概念を脱ジェンダー化しているというカランの議論はいささか強引な印象を拭いきれない[8]。結婚のコンテクストに即して読んでみた場合，両性質の混淆はむしろ性交渉のメタファーとして，一見すると非身体的な元素の結合からも換喩的にセクシュアルな意味を汲みとれるよう企図されているように思われる。このような仕方で Union の積極的なジェンダー化を狙った仕掛けは，「理性」が花嫁を婚儀の生贄として新郎に捧げる場面にもはっきりと見てとれる。

Come, Hymen, make an inner ring,
And let the sacrificers sing;
Cheer up the faint and trembling bride,

That quakes to touch her bridegroom's side…（lines 360-363）

これを聴いた人々は恐らく初夜に女性が経験する象徴的な暴力行為を思い浮かべるであろう。事実，初期近代の演劇作品や医学書を紐解くと，「内なる輪（an inner ring）」には処女膜という意味合いが含まれているのに気がつく（Loughlin 835）。舞踏者たちが形作る円の中心に入り，そこで「生贄の執行者」を新婦にあてがう「理性」の描写は，処女喪失の瞬間を想起させる。確かに，国教会派の聖職者たちは夫婦間の性行為に対してはきわめて寛容な見方をしていた（Fletcher 175-179）。だが，こうしたセクシュアルな寓意は同時にスコットランド的アイデンティティと国家統合の言説が包摂する両価性を再生してしまうことを忘れてはならない。そして，一連の祝祭を締め括る祝婚歌には，処女喪失と国家的アイデンティティの喪失を重ねて見せる機能があるように思われる。

3. 祝婚歌と国民融和のレトリック

ジェンダー化された身体，とりわけ女性的身体の表象が国家統合に潜む危険性を映し出す仕掛けは，婚姻礼賛の壮麗なスペクタクルの結びである祝婚歌（Epithalamion）の中でより高度に活用されている。ローマ式の婚儀を再現する試みの一つとして書かれたこの詩は，祝婚歌というジャンルをUnion のテーマと連携させ，結婚生活の幸福を説き，新郎新婦に床入りを急かすような表現で溢れている。こうした伝統的なローマ風祝婚歌を国家統合論争との関連で読み解いた場合，とりわけ両義的な象徴性に富んでいるのが，ハイメンが花嫁を拉致する様子を描いた一節であろう。

Help, youths and virgins, help to sing
The prize which Hymen here doth bring,
　　And did so lately rap
　　From forth the mother's lap,

To place her by that side
Where she must long abide.（lines 407-412）

結婚の神によって「母親の膝」から攫われる乙女の姿には古典のアリュージョンがあり，ローマ史における伝説的国家統合が暗示されているのだが，それはこの祝婚歌に付された欄外注（marginalia）の中で詳述されている。出版に際してジョンソン自身が書きこんだこの注釈は，花婿側による花嫁の誘拐を容認し，その論拠をつぎのような神話的事実に据えている。

> The bride was always feigned to be ravished *ex gremio matris* ［‘from her mother’s bosom’］; or, if she were wanting, *ex proxima necessitudine* ［‘from the nearest relation’］, because that had succeeded well to Romulus, who by force gat wives for him, and his, from the Sabines.（Jonson 2 : 710）

誘拐婚の妥当性を裏づける出来事としてここで引き合いに出されているのは，ローマの建国者ロムルスとその軍勢によるサビニ人女性略奪のエピソードである。リウィウスの『ローマ建国史』によれば，イタリア半島に都市を築いたロムルスは，自身の同胞に妻を娶らせ，次世代の市民を生ませるために，奸計を弄して異民族であるサビニ人の娘たちを拉致したという（Livy 32-39）。ホワイトホールで宮廷仮面劇を見ていた知識層は，これに続くローマ人とサビニ人の民族的統合のことも当然知っていたはずなので，祝婚歌を聴いて結婚とイングランド人・スコットランド人融合の間に類推を働かせたというのは大いにありうるわけである。[9]

翻って考えてみれば，初期近代のイングランドで人口に膾炙していたこの神話を民族融和の模範とするのは，国家統合論者がしばしば用いたレトリックであった。フランシス・ベイコン（Francis Bacon）による親国王派の政治パンフレット『イングランドとスコットランド両王国の幸福な統合に関する小論』（*A Brief Discourse Touching the Happy Union of the Kingdoms*

of England and Scotland）は，つぎのような文句で結ばれている。

> I do wish（and I do wish it, not in the nature of an impossibilitie, to my thinking,）that this happye vnion of your Maiesties two Kingdomes of *England* and *Scotland* ; may bee in as good an houre ; and vnder the like diuine prouidence, as that was, betweene the *Romaines* and the *Sabines*.（Bacon C 5）

両王国の「幸福な統合」に期待を寄せるベイコンの思考にローマ人とサビニ人の姿がちらついていることは明らかである。そうした彼の願いは同時期に執筆された著者不詳の『タティウスの凌辱』（*Rapta Tatio*）でも反芻されている。サビニ人の王タティウスの名を冠したこのパンフレットの書き手は，“Many will be the marriages in time, to make our Nations fully one”と述べて，国際結婚を通してイングランド人とスコットランド人が友好を深めるよう説きつつ，やはりその後には“What was it made the Romans and the Sabines friends, but the Romanes getting to wiues the Sabines daughters”という問いかけを忘れない（F 2^{v}）。こうした政治パンフレットに見られるように，ローマ人・サビニ人統合の神話は結婚，民族融合，国家統合という規模の異なる社会的結合を包括している点で，グレートブリテンの輪郭を表すと同時にこれまで維持してきた国家的身体の危機を示唆する格好の材料となった。ローマ史を含む古典とジェイムズ朝の政治文化に親しんでいた鋭敏な聴き手たちは，祝婚歌の時宜を得た政治的寓意を読み解くことができたに違いない。

4. 国家的身体への眼差し

ベン・ジョンソンの政治的寓話には Union をめぐる葛藤が通奏低音として流れているわけであるが，これは同時に前王朝以来の国家表象を解体してしまう危険性を孕んでいた。というのも，エリザベス一世の宮廷で形成され

た「残滓的」とも定義づけられる文化システムは，ジェイムズ一世の国家統合論とは非常に折り合いが悪く，その理由は処女王の治世で醸成された政治文化にあるように思われる。そこでまず，エリザベス朝特有の王権神話と身体のメタファーの関係を概観するにあたって，ルイス・エイドリアン・モントローズ（Louis Adrian Montrose）の考察を引用しておきたい。

> The inviolability of the island realm, the secure boundary of the English nation, is thus made to seem mystically dependent upon the inviolability of the English sovereign, upon the intact condition of the queen's body natural.（315）

モントローズは「王の二つの身体」理論と女王の身体的実践との興味深い融合を観取し，彼女を取り巻く政治的言説が処女の身体とイングランドの不可侵性を結びつけていたことを指摘する。これは孤立主義の巧妙なプロパガンダとして効果的だった一方で，政治的融和や社会的結合を積極的に支持する新王朝の政治文化には到底包摂されえず，残滓的と勃興的ともいえる相反するトポスの不協和的混在は，初期ジェイムズ朝のパネジリックの大きな特徴となった。無論，それはイングランド的アイデンティティとブリテン的アイデンティティの対立として読みかえることもできるであろう。

こうした後期エリザベス朝の残滓的象徴体系と初期ジェイムズ朝の勃興的象徴体系の相克を含む文化的実践として位置づけられる宮廷仮面劇の一つが，トマス・キャンピオン（Thomas Campion）の『ヘイ卿の仮面劇』（*The Lord Hay's Masque*）である。前述したスコットランド人ジェイムズ・ヘイとイングランド人ホノラ・デニー（Honora Denny）の結婚を祝して書かれたこの余興には，月の女神シンシア（Cynthia）と太陽神フィーバス（Phoebus）が対置されているが，言わずもがなこれらはそれぞれエリザベスとジェイムズの文学的表象として見ることができる。シンシアの寵愛するニンフ（デニー）とフィーバスの騎士（ヘイ）との象徴的婚姻をめぐる神々の緊張感あふれるやりとりは，伝令役ヘスペルス（Hesperus）を通し

て間接的に知らされ，“Cynthia is now by Phoebus pacified, / And well content her nymph is made a bride”（lines 316-317）という台詞によって，最終的にシンシアのほうが折れて結婚を認めたことが明かされる。この作劇法には多分に政治的意図があったに違いない。キャンピオンはエリザベスを寓意する女神にあえて処女性礼賛の言説を放棄させ，前王朝における君主および国家の表象を結婚ひいては政治的融和を是とする新王朝のイデオロギーに還元してしまう。すなわち，賛否両論の国際結婚をことほいだキャンピオンの異類婚姻譚には，残滓的象徴体系と勃興的象徴体系の衝突を巧みに利用し，国家統合論に迎合した祝祭を舞台にかける狙いがあったように思われるのである（Curran 74-75）。

一方で，こうしたエリザベス朝宮廷文化の遺産は『ハイメンの仮面劇』にはおおよそ窺うことができない。キャンピオンの描く恐ろしくも気高い乙女の守護神とは対照的に，ジョンソンはシンシアを子孫繁栄のテーマと連携させているが，そこには処女王崇拝に基づいた孤立主義の面影はまったくない。祝婚歌の中に，“Nor let it［i.e. the gentle womb］prove a tomb, / But ere ten moons be wasted, / The birth by Cynthia hasted”（lines 490-492）とあるように，ジェイムズ朝の象徴体系に包摂されたシンシアの仕事は，もはや処女性を弁護することではなく，月の女神として Union の賜物である出産を手助けすることになる。ここでは，エリザベス表象は書き換えられているというよりも，それ自体がテクストからとり消されていると言える。ちなみに，宮廷仮面劇の翌日に行われた試合（Barriers）では，独身および処女性を擁護する女性が現れてエリザベスの影をおぼろげながらちらつかせる。しかし，やがて彼女の正体は欺瞞に満ちた「意見（Opinion）」であると判明し，結婚を賛美する「真理（Truth）」が勝利を収める形で試合は決着する。処女性礼賛の言説は，やはり強力な象徴体系を与えられないまま絶対的「真理」の敵として舞台上で敗北させられるのである。

それゆえ，ジョンソンが作り上げた Union の祝祭は最初から反対派の抵抗を許さず，交渉の場すらも用意していない。この宮廷仮面劇は，楽士たちが“Bid all profane away”（line 48）と宣言し，独身を貫こうとする者や

処女崇拝者を追い払うところから始まり，婚儀の結末は性交渉を急かすような表現で締め括られている。

> Cease, youths and virgins, you have done ;
> Shut fast the door ; and as they soon
> To their perfection haste,
> So may their ardours last. (lines 503-506)

こうしたレトリカルな結婚礼賛を政治的コンテクストに即して解釈した場合，イングランドとスコットランドという夫婦の“perfection”に相当するグレートブリテンの誕生は時間の問題ではなく「急いで」着手すべき最優先事項として切望されているように思われるかもしれない。だが，子どもの生誕だけでなくその過程である生殖行為をも連想させる様々な仕掛けは，この劇作家が Union の有する両価性をしたたかに前景化している証左である。ジョンソンはエリザベス一世の神話がまだ機能していた時期に，キャンピオンのような仕方でそれを換骨奪胎せず，むしろその象徴体系をことごとく逆転させた。そうした作劇上の特質について，バトラーはいみじくも“Perhaps the feature which best demonstrated the masque's radicalism was its representation of Union as a process necessitating violence”（119）と指摘している。この「急進性（radicalism）」を形成する能動的な要因の一つは，ここで言われている Union の表象の仕方もさることながら，イングランド人が受容してきた，処女王崇拝と結びついた国家的身体を結婚のコンテクストの中で再定義するよう仕向けたところにある。『ハイメンの仮面劇』は終始一貫して，イングランドの処女喪失という国家統合の言説にある裏の面を映し出しているのである。

結　　論

『ハイメンの仮面劇』はジェイムズ一世が議会演説でしたように，国家統

合を国民の同意に基づく望まれた結婚として示しているわけでも，キャンピオンの宮廷仮面劇のようにエリザベス朝的国家観からジェイムズ朝的国家観への単純な書き換えを狙っているわけでもない。本作品において，ベン・ジョンソンはイングランドとスコットランドの結婚という政治的レトリックを利用して国家統合論の潜在的な両義性をあばき出し，従来のイングランド的アイデンティティに揺さぶりをかけている。とはいえ，社会的結合の過程に性的暴力を容認しつつ欲望を肯定的に描く戦略は，ともすれば余興の祝祭性を損ない，スコットランド人批判の言説ともつながってしまう危険性を有している。それにもかかわらず，処女喪失という Union の表象が孕むトラウマ的事象をジョンソンが強気にも前景化してみせたのは，結婚を祝すためという本来の執筆目的と大いに関係がある。

ジョンソンが性的欲望や肉体的結合の寓意をこれほど躊躇なくちりばめられたのは，そうすることが実際の結婚をことほぐ筋書きに相応しかったからということに尽きる。宮廷内の勢力伯仲を企図したエセックス伯とフランセス・ハワードの婚姻は，グレートブリテン構想がいかにしてイングランドの国家的身体を脅かすのかを問い直す材料をジョンソンに提供した。グレートブリテンが政治的論争の渦中にある時期に執筆されたこの仮面劇は，イングランドとスコットランドの統合という前代未聞の政策が人々の心に植えつけた不安や葛藤を，巧妙にもジェンダーの言説にすり替えて舞台にかけたわけである。これ以降もジョンソンはジェイムズ一世やその息子チャールズ一世（Charles I）をグレートブリテン国王として賛美し続けたが，その名前が指示する国家概念についてかくも批判的に精査することはもはやなかったように思われる。その意味で，『ハイメンの仮面劇』はこの宮廷仮面劇作家の領袖が書き上げた数多ある作品の中でもひときわ異彩を放っている。

※本稿は 2021 年度関西学院大学英米文学研究発表会での口頭発表に加筆修正したものである。

注

1 バトラーやカランなどの先行研究でも指摘されているように，『ハイメンの仮面劇』における Union の意味は重層的でコンテクストに依存しているため，本稿では特定の日本語訳をつけずに英語表記で統一する。

2 国家と身体を照応させるレトリックはすでにプラトンやアリストテレス，キケロ，セネカなどにその用例が見られるという（Curran 20 n.12）。

3 ベン・ジョンソンからの引用はすべて Cambridge 版全集（2012）に拠る。

4 詳細については 2 節で述べる。

5 Cambridge 版全集の編者デイヴィッド・リンドリー（David Lindley）は宴会の初日に上演された宮廷仮面劇と二日目に行われた試合風の余興を合わせて収録しているが，出演者や上演形式の違いなどから，本稿ではこれら二つをそれぞれ別のテクストとしてみなし，宮廷仮面劇のみを議論の対象とする。

6 グレートブリテン構想の影ともいえる反スコットランド感情は，ステュアート朝の最初期からすでに大衆文化に浸透していた。ジョンソン自身，1605 年初演の風刺喜劇『東行きだよ！』（*Eastward Ho!*）の中で南下してくるスコットランド人を揶揄し，当局の不興を買って投獄までされている（Wormald 19-20）。

7 このとき国王夫妻にはアンが身籠っていたソフィアに加えて，ヘンリー，エリザベス（Cambridge 版全集の注では誤って除外されている），チャールズ，メアリーの四人の子どもがいたが，メアリーとソフィアはほどなくして夭折した（Jonson 2 : 670 n.73-74）。

8 ゲイル・カーン・パスター（Gail Kern Paster）によると，体液論の枠組みの中では性別による身体的差異はつぎのような仕方で理解された。すなわち，男性の身体は高温かつ乾燥していて，女性の身体は低温多湿である，と（77）。

9 カランはトマス・キャンピオンの『ヘイ卿の仮面劇』におけるフィーバスの騎士がシンシアの取り巻きを凌辱したという逸話が国家統合をめぐる文化的葛藤を示唆しているとして，キャンピオンの作劇術をローマ人・サビニ人融合のエピソードと結びつけて読み解いている（66-68）。しかし，イングランド人・スコットランド人融合の恐怖を凌辱の恐怖に置き換える戦略は，ジョンソンが先行して利用していた可能性を本稿では強調しておきたい。

参考文献

Bacon, Francis. *A briefe discourse, touching the happie vnion of the kingdomes of England, and Scotland Dedicated in priuate to his Maiestie.* London, 1603, *EEBO,* reo.nii.ac.jp/hss/4000000000605553/fulltext. Accessed 31 Aug 2021.

Butler, Martin. *The Stuart Court Masque and Political Culture.* Cambridge UP, 2008.

Campion, Thomas. *The Lord Hay's Masque. Court Masques : Jacobean and*

Caroline Entertainments, 1605-1640, edited by David Lindley, Oxford UP, 1995, pp.18-34.

Cuddy, Neil. "Anglo-Scottish Union and the Court of James I, 1603-1625." *Transactions of the Royal Historical Society,* vol.39, 1989, pp.107-124.

Curran, Kevin. *Marriage, Performance, and Politics at the Jacobean Court.* Routledge, 2009.

Dictionary of National Biography, edited by Leslie Stephen and Sidney Lee, vol. 25, Smith, Elder & Co., 1891.

"Early Stuart Libels : An Edition of Poetry from Manuscript Sources." Edited by Alastair Bellany and Andrew McRae. *Early Modern Literary Studies Text Series I,* 2005, http : //purl.oclc.org/emls/texts/libels/. Accessed 31 Jul 2021.

Fletcher, Anthony. "The Protestant Idea of Marriage in Early Modern England." *Religion, Culture and Society in Early Modern Britain : Essays in Honour of Patrick Collinson,* edited by Anthony Fletcher and Peter Roberts, Cambridge UP, 1994, pp.161-181.

Galloway, Bruce. *The Union of England and Scotland, 1603-1608.* John Donald, 1986.

Gordon, D. J. *The Renaissance Imagination : Essays and Lectures by D. J. Gordon.* Edited by Stephen Orgel, U of California P, 1975.

James VI and I. *King James VI and I : Political Writings.* Edited by Johann P. Sommerville, Cambridge UP, 1994.

Jonson, Ben. *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson,* edited by David Bevington, et al, 7 vols, Cambridge UP, 2012.

Livy (Titus Livius). *Livy : in Fourteen Volumes,* translated by B. O. Foster, vol. 1, Harvard UP, 1919.

Loughlin, Marie H. "'Love's Friend and Stranger to Virginitie' : The Politics of the Virginal Body in Ben Jonson's *Hymenaei* and Thomas Campion's *The Lord Hay's Masque*." *English Literary History,* vol.63, no.4, 1996, pp.833-849.

Montrose, Louis Adrian. "The Elizabethan Subject and the Spenserian Text." *Literary Theory / Renaissance Text,* edited by Patricia Parker and David Quint, The Johns Hopkins UP, 1986, pp.303-340.

Peck, Linda Levy. *Northampton : Patronage and Policy at the Court of James I.* Allen & Unwin, 1982.

Paster, Gail Kern. *Humoring the Body : Emotions and the Shakespearean Stage.* U of Chicago P, 2004.

Rapta Tatio The mirrour of his Maiesties present gouernment, tending to the

vnion of his whole iland of Brittonie martiall. London, 1604, *EEBO,* reo.nii.ac.jp/hss/4000000000605230/fulltext. Accessed 31 Jul 2021.

Stuart Royal Proclamations : Royal Proclamations of King James I, 1603-1625. Edited by James F. Larkin and Paul F. Hughes, Clarendon P, 1973.

Wormald, Jenny. "The Union of 1603." *Scots and Britons : Scottish Political Thought and the Union of 1603,* edited by Roger A. Mason, Cambridge UP, 1994, pp.17-40.